特集
手術におけるチーム医療の推進と手術看護の役割拡大

6-1

6. 手術看護の役割の拡大

周麻酔期看護師の誕生と役割への期待

田中　聡
信州大学医学部 麻酔蘇生学教室 准教授

POINT

- 手術室看護師は専門性と実践力を向上させ，役割を拡大することが求められています。
- 周麻酔期とは，麻酔前，麻酔中，麻酔後の一連の期間を示します。
- 修士課程を修了した周麻酔期看護師は，麻酔科専門医と協働します。

はじめに

「周術期」とは，術前，術中，術後の一連の期間を示しますが，外科系診療科の立場からの用語です。「周麻酔期」とは麻酔科診療を軸にした，麻酔前，麻酔中，麻酔後の期間を示します。周麻酔期看護師とは，麻酔科専門医の指示下に麻酔科医の業務を補助する看護師です。これまで日本では，麻酔科医の業務を専門的に補助する看護師は存在しませんでした。麻酔科医と協働する看護師の育成を目的とし，2010年に聖路加看護大学で周麻酔期看護学修士課程が開講しました[1,2]。同様の教育課程が横浜市立大学，愛知医科大学でも開講し，2017年度から信州大学でも開講します。高度な実践力を有し，麻酔科診療に専従する看護師が育成されつつあります。

本章では，周麻酔期看護師誕生の背景と，期待される周麻酔期看護師の役割について概説します。

周麻酔期看護師誕生の背景

麻酔科学に関連する診療の拡がりと良質な医療を求める社会の要請

麻酔科学は，術中の恐怖や痛みを緩和するだけでなく，循環，呼吸を含めて侵襲から生体を護る学問として発展してきました。鎮静薬，鎮痛薬，循環・呼吸管理に精通した麻酔科医の業務は手術麻酔だけでなく，集中治療，ペインクリニック，緩和医療の領域に拡がっています（図1）。消化器内視鏡検査・治療や小児のMRI検査では，不動化や苦痛の緩和を目的として，鎮静下に実施されることが増えています。安全で良質な医療を提供するために，麻酔科学に精通した医療者の育成が必要です。

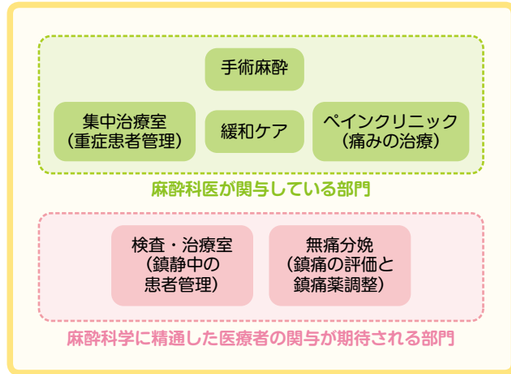

図1 麻酔科学に関連した診療の拡がり
麻酔科医は手術室の麻酔だけでなく，集中治療室での重症患者管理，ペインクリニックでの難治性の痛みの治療，そして緩和ケアに活動の場を拡げています。検査室・治療室の鎮静や，無痛分娩における鎮痛についても，麻酔科学に精通した医療者の関与が求められています。

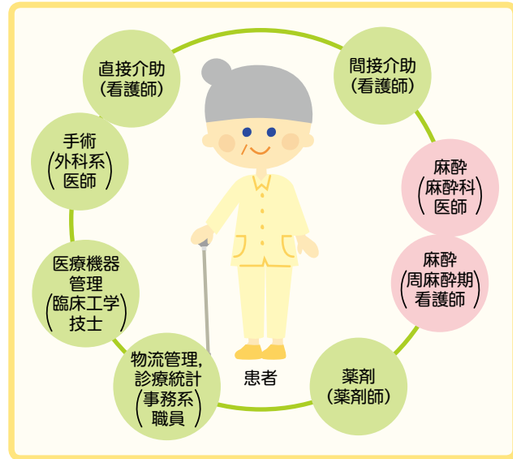

図2 手術室における周麻酔期看護師の位置づけ
手術室における医療チームは多岐にわたる職種により構成されます。周麻酔期看護師は麻酔科医と協働しながら，麻酔前，麻酔中，麻酔後の麻酔科診療に専従します。

麻酔科医のマンパワー不足とチーム医療の推進

拡大した麻酔科診療のすべてをカバーできるほどに麻酔科医は充足していません。本来は医療の安全と質の向上という観点で議論されるべきですが，麻酔科医のマンパワー不足は，周麻酔期看護師誕生の大きな要因です。日本麻酔科学会では，麻酔科医マンパワー不足への対策として，「麻酔業務における役割分担の明確化」を提言しています[3]。手術に際して手術器具の準備や外科医の補助を看護師が行っていますが，麻酔に関連した業務もチームで役割分担をすることが求められています。

麻酔科診療チームに専従する看護師の不在

これまで手術室看護師は直接介助（器械出し）と間接介助（外回り）に分けられてきました。直接介助は術式を把握し，それに合った器械を準備し，術中はすばやく器械を出すことにより，外科系医師の負担を軽減し，安全な手術の遂行に貢献しています。一般的に間接介助の看護師は，麻酔導入時や覚醒時には麻酔科医を補助しますが，それ以外の時間帯は，手術室全体を見回しスムーズに手術が進行するという視点で業務を遂行しています。麻酔科診療に専従する看護師はこれまで存在せず，麻酔科医と協働する周麻酔期看護師の育成が求められていました（図2）。

学会が進める看護の専門分化

医療の高度化に伴い，看護の専門分化が進んでいます。看護の質と実践力の向上を図る目的で，日本看護協会では手術看護認定看護師[4]を，日本手術看護学会では手術看護実践指導看護師[5]の認定をして